

環境・リスク情報にどう向き合うべきか



同志社大学教授 中谷内一也氏

。温暖化の影響で鳥が沈下！、ホッキョクグマ、絶滅の危機！。化学物質に汚染された食肉が日本上陸？。一人々の環境意識の高まりからか、最近こうした報道に接する機会が多い。映像や写真を見せられるとショックを受け、不安に駆られる。しかし時間が経ったり、冷静に調べてみると結局は根も葉もない話であることもある。こうした情報はどのように受け止めるべきなのだろうか。リスク心理学

を専門にする同志社大学心理学部教授の中谷内一也氏は、人の心には2つのシステムがあることをまずは理解すべきだと言う。

「ひとつは直感的・感情的なもの、もうひとつは論理的・分析的なもの。この前者のほうが少々「くせもの」なのです」

例えば直感的・感情的システムは「特定の事例」に弱い。感染の危険性が10万人に1人だったとしても、その1人の名前と顔と様子を具体的に見せられると、私たちは「かわいそう！」「非常に危険！」と過敏に反応しがちだ。一方でマスコミはニュースバリューの高いもの、つまり特定のケースを取り上げる性質があり、印象的な映像を多用するきらいもある。こうして人の特性とマスコミの特性とが合致して、私たちはリスクを過大視してしまうようになる。

「直感的・感情的な心の働きがくせものといつても、人類が生き延びるために身につけてきた能力だからなくすことはできません。一方の論理的・分析的なシステムを、前者を監視するものとして強化していくのがいいと思います」

何か衝撃的な映像に心揺さぶられたとき、

「ちょっと待て」と自分の心にブレーキをかけ、論理的・分析的な心の働きも思い出そうということだ。

さまざまなリスクを比較して冷静に判断したい

論理的・分析的な判断を補助するツールとして、中谷内教授はリスクの二覧表(リスク比較セット)の使用を提唱している(図5)。こうしたものがあれば特定のケースに動揺することなく、そのリスクを冷静に受け止めることができる。例えば、0157の報道などにより食中毒のリスクが年々高まっている印象があるが、事実は逆だ。また図中の「入浴中の水死」が示すように、年齢によりリスクは異なる。

図5さまざまなリスク一覧(10万人当たりの年間死亡者数)

| 種類 | 概数 |
|---------------|-------|
| ガン | 250 |
| 喫煙 | 80 |
| 自殺 | 24 |
| 老衰 | 19 |
| 入浴中の水死(65歳以上) | 9.9 |
| 交通事故 | 9 |
| 入浴中の水死 | 2.6 |
| 火事 | 1.7 |
| B型肝炎 | 0.66 |
| インフルエンザ | 0.55 |
| 他殺 | 0.52 |
| 食中毒(1960年) | 0.27 |
| 自然災害 | 0.1 |
| HIV | 0.04 |
| 食中毒(1980年) | 0.017 |
| 飛行機事故 | 0.013 |
| 食中毒(2000年) | 0.004 |
| 落雷 | 0.002 |

※資料提供:中谷内一也著「リスクのモノサシ」(NHK出版)より

る。何か問題が発生した際、行政やマスコミが必ずこうした表を用いて事実を伝えれば不安を煽ることはないだろうが、それは期待できない。となれば個人的に作成しておくこともひとつのやり方だろう。こうした「生活リスク」についてはネット上でもさまざまな情報が収集できるので、高校生たちにも一度調べてみることをお奨めしたい。

以上のように、環境リスク情報については行政、マスコミ、一般人など間で適切なコミュニケーションが取れているとはいえない状況だ。そのため間に立つて双方のコミュニケーションを助ける「リスクコミュニケーション」の専門家が社会的に求められている。心理学を学べばそうした専門家になる道も拓けるだろう。